

# アメリカを動かした日系女性

—メアリー・ツカモトの生涯を通じて—

The Japanese American Femel Who Changed American Society  
—Mary Tukamoto's Career—

山 本 茂 美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

「真実を知りたがっている四世の子供たちの無邪気で不審げな目を見て、私は良心的な教育者、またアメリカの責任ある二世市民として、その子供たちに正直に答える義務を負っていると確信した。立ち退きを経験し、私たちのことを記した歴史を入手できる立場にあって、なお自信に満ち、忠実で、面倒を見てあげられる人になるためにも、私は態度をはっきりさせたいと思った。私は、皆が進んで自らの過ちを正し、建国の礎となった夢と偉大な原則を実現すべく努力し続ける国アメリカの、誇り高く幸福な市民になる手助けをするために、私の秘めた激怒を生かすべきと考えた。

日系アメリカ人が被った恥辱と苦難をはっきり覚えている私たち年長の二世が自分たちの経験を語らねば、補償を勝ち取るのは不可能である。老年期に達した私たちには、素晴らしい国の、面倒見のいい、成熟した市民としての責任を負うためには、勇気とスタミナが必要である。『われら合衆国の人民』は、この国が世界一の国であると信じていることを行動で示す必要がある。私たちは警戒を怠らず、またヒロシ・カシワギの言葉を借りれ

ば、『私たちの民主主義の荒々しい守護者となる。』必要がある。私たちの憲法が言っているのはまさにそのことである。』<sup>1)</sup>

この文章は *We the People* の一ページに書かれたものである。この本の著者はメアリー・ツカモトである。彼女はカリフォルニア州フローリン生まれ。元公立小学校教諭。生涯の大部分を、政治的行動と歴史の修正に捧げた。1989年には、カリフォルニア州教育委員会の選出で「州教育者の栄誉の殿堂」入りを果たした他、強制収容被害者の補償獲得運動の成功に貢献したとして、合衆国政府司法省から表彰を受け、1922年には、全米教育者大会で、人権及び市民権委員会によりエリソン・オニズカ記念賞を授与された。1992年、フローリン市に「メアリー・ツカモト小学校」を開設。1998年1月6日サクラメント市で病死。享年82歳であった。

私は今まで多くの日系アメリカ人の文学を研究してきた。日系アメリカ人の歴史から始まりアメリカ文学の中に二次資料としての価値を見出し30年以上多くの作品を研究してきたが、近年日系アメリカ文学という領域が薄れてきたのでこの研究からは離れていこうと考えていた。しかし私にもメアリーのように

もう一度真珠湾攻撃後や強制収容所での生活、さらにはその後の苦労を書かれた作品をもう一度読み進め研究し歴史的な事実を確認したいと思うきっかけができたのであった。

ある大学の授業中英文で一般常識の内容を教えることになっていた。その中で「日本帝国海軍が真珠湾に奇襲攻撃を仕掛けそれが太平洋戦争の始まりだった。」という内容があった。そのころオバマ大統領が広島の実爆メモリアルホールを訪れたことで話題になっていた。原爆投下は日本海軍の攻撃から始まった戦争を終結させるため正当な出来事だったという多くの国民の意見を振り切ったの歴史的一ページだった。この歴史的背景を事実だけを話した時ある学生が激しく抗議してきた。「真珠湾攻撃は天皇を守るため正当な行動であったのにその説明は間違っている。」というものだった。このことがきっかけで私はもう少し当時のアメリカ、特に日系アメリカ人の様子を知る作品を読み進め歴史的な事実を再認識したいと考えた。そして機会をみて、誤った考えの学生を含め真実だけでは何かの形で多くの学生にも伝えたいと考えたのである。

## 1 1988年市民的自由法について

1988年8月10日、レーガン大統領によって「1988年市民的自由法」署名された。

この内容について金城大学論集「1988年市民的自由法と日系アメリカ三世文学」<sup>2)</sup>中で述べている。ここで改めて確認したい。

アメリカ合衆国Public Law100-83

1988年8月10日

戦時下市民移住、抑留に関する委員会の勧告を履行するために、この法案は、アメリカ合衆国の上院と下院によって制定された。

### 第1章 この法案の目的は

(1) 第二次世界大戦中の日系の合衆国市民と永住権を持つ日本人の立ち退き、移住、抑

留等の基本的な不正を確認すること。

(2) このような市民や永住権を持つ外国人の立ち退き、移住、抑留等に対して、合衆国民に代わって詫びること。

(3) いかなる類似の事件が再び起こることを防ぐために、このような個人の抑留について公に知らせるための努力を支えるために公的教育資金を提供すること…。

## 第2章 議会の声明

(a) 日系人の個人に関して一「戦時下市民移住、抑留に関する委員会によって述べられているように、戦時下市民の立ち退き、移住、抑留によって日系市民および永住権のある日本人に対して、重大な不正がなされたことを議会は認める。委員会が証明しているように、これらの行為は、委員会によって証明された適当な安全確保の理由なしに、またスパイ行為やサボタージュの行為なしに行われたものであり、人種的偏見、戦争時のヒステリーと政治指導力の失敗によって、大きく動機づけを与えられた。締め出された日系人は、有形無形の巨大な損害に苦しんだし、すべての教育と職業の訓練において数えきれない損失があり、それらのすべては重大な人間的苦しみをもたらしたのであり、それらの重大な過ちを、自国は招いたのであるのだが、それらに対して適切な補償がなされてきていない。これらの日系人の基本的な侵略に対して、議会は国民に代わって詫びる…」この法律で特に注目されることの1つは、賠償金を「公的教育資金」とされていることと、第二部でアリユーション諸島の島民への賠償についても述べられていることである。アリユーション列島の島民もメアリーの公聴会での様子を語っている中で同じように証人になった、と書かれている<sup>3)</sup>。

法案が成立するまでに行われた多くの日系人二世三世たちの戦いと公聴会の様子がこの

本には書かれている。その内容については最後に書いていきたいと考えるが今回は、ある女性の目から見た太平洋戦争以後の日系移民の真実を追っていこうと考える。そこで3つの点について考察をしたい。第一点は先に述べたように日系二世の女性の目を通して描かれた強制収容所での生活の描写である。第二点は強制収容所を出てからの日系人の暮らしである。これまで多くの作品を読んできたが戦後の生活を描写した作品はほとんどなかったからである。第三点は市民的自由法が成立する過程の日系人の活躍である。これもまたなかなか作品がみつからなかったからである。では、まず強制収容所での生活から考察していきたいと思う。

この本の第一章にはこのような言葉がある。

「45年前の記録から今でも生々しい場面を思い出すとき、自分がいかに無知であったか、そしてその後もずっとそうであったことを実感している。立ち退きで自分の家を離れ、強制収容所、そして見知らぬ土地での収容生活を経験した。最後は、怯えうろたえた状態で故郷へ戻ってきた。自分の話が他の人にとって興味に満ちたものであろうと考えるのも、やはり無知かも知れない。しかし、今の自分は、この偉大な素晴らしい国の一市民として、二十世紀の大部分を生き抜いてきた一個人の経験をアメリカの歴史のに記録せずにはいられない気持である。私の人生は国内外の出来事に左右されてきたように思える。しかし、それらの出来事の多くについては、何年後になってから、アメリカの歴史や第二次世界大戦前の、戦時中、そして戦後の政治権力を自分で調べるまでに殆ど知らなかった。しかし、1941年12月の日曜日の夕方に時点で、私が知っていたことは、ただ自国と日本が戦っていることだけで、生まれて以来、あれほど怯えたことはなかった。」<sup>4)</sup>

## 2 真珠湾攻撃以降の日系人の生活について

真珠湾攻撃の後、日系人の生活は一転する。このことについてはいままで多くの論文の中でも作品を通じて述べてきた。しかし子供を持つ二世の女性の語った作品はなかった。そこで、強制収容所の中での親としての視線で見た描写について考察を進めたい。

大統領行政命令第9066号にフランクリン・D・ルーズベルトが署名してからの日系人の混乱は今までも多くの作品の中で描写されている。自分たちの持ち物はトランク一つと決められていて、所有していた家屋敷を捨てて砂漠の収容所に追いやられていく。この中で今まで書かれていなかったカメラについての内容があった。カメラを持っていこうとしたメアリーの夫アルは、保安官代理に登録しなければならぬと知らされたという。いかに収容所への道が世間から秘密にされていたかを描写した記録だと考える。さらに障害のある息子を残していくように命じられた母親は泣きながら施設に連れていかれる息子を見送ったが数週間もしないうちに施設で亡くなったという悲報を聞く。愛情が人一番必要な障害のある子供まで引き離し殺してしまった政府の対応に作者は強い怒りを抱いていた。半面白人はすべて日系人に嫌悪感を抱き収容所に送られるのを歓迎したと今までのニュース記事には書かれていたが、非難を顧みず見送りに来てくれた友人知人、隣人についても書かれていた。

さらに収容所についた後の描写ではまず家族がばらばらになっていることを心配して家族親戚が協力して同じブロックには入れるようにしたという。そんな混乱した毎日の中でメアリーの心の中では、「なぜ、なぜ、なぜ、私はこれまで何をして来たというのか、何故私はこういうことになっているのか、私が何をしたというのか？」<sup>5)</sup>と大声で叫びたいと

思っていたという。この気持ちは収容された日系人すべてのものであった。常に我慢して自分を犠牲にして生きてきた日系移民特に一世たちはただ寡黙に自分の置かれた状況を受け入れていた。メアリーは、比較的年上の二世として両親祖父母親戚に心を配り、しかし収容所では娘の教育が遅れてしまう不安から収容所での学校づくりに奔走する。

「私たちの遺産は、子供のために相応しい環境を確保する目的に向かって、生活、家庭、仕事、娯楽を形成することによって、時々刻々と築かれていかなければならない。私たちは明日を作る親である。私たちが築く家庭は子供たちの環境である。美、真実、自己犠牲が生活で優先され、精神的価値観が常に家庭に存在し、そして両親によって与えられる崇敬、愛国心、および義務への献身についての高い理想が優先されれば、第三世代へ引き継がれる遺産は確かなものとなるだろう。」<sup>6)</sup>

このような言葉が書かれている。メアリーは高校卒業後パシフィック大学に入学した。教職を取るためであった。しかし提供されたカリキュラムは教会関係科目中心の宣教師養成目的のものだったという。現実的には東洋系の女性が教師を一生の仕事にするのは難しいからという大学からの提案だったという。

JACLの仕事をしていたメアリーは日系人全体のためにできるだけ待遇をよくしようと活動をした。環境が変わって不安定になった子供たちをさらに不安にさせないように表面に不安な心を出すことなく冷静に対応しようとした。今まで仕事に追われて生活していた一世の人たちが生きがいをなくし年老いていくばかりの時集会所を使いそれぞれの人たちの得意なことを子供たちに教える先生になってもらうことで子供たちの教育と一世たちの生きがいを見つけていった。一方何人かの周りの人達は命を失ったという。障害があるた

め収容所から施設に移されて数週間で亡くなった人や不安とストレスのために命を落とした老人、さらには50歳半ばの人の死も書かれている。もしも収容所にいれられなければ助かったいくつかの命のため回りの人たちは不当な扱いをされた政府に対しての怒りや失望が増服していった。

### 3 収容所からの解放へ

今まで私が研究してきた作品や新聞の中では書かれていなかった内容について述べていきたい。この作品の中では次のような文面がある。

「ピアノ教師で、フレズノ州立大学の学生でもあった音楽の才能のあるカズエ・セキヤが、ツウク大学への入学が許可されたのを皆で喜んだ。というのは、彼が収容所を出て自由の身になれるということでもあったからである。彼女が我々に敵意をもった環境に移っていくその勇気もほめたたえてあげた。」<sup>7)</sup>

このようなことがあったのも初めて知ったことであった。終戦まじかには少しずつ大学には行って行った事実は知っていたが、このような初期の段階でも収容所を出られた人がいたことは今まで確認できていなかった。排日の嵐の中、この女性が収容所を出てどのような生活をしたのかも改めて追っていきたい。逆に収容所に日系人のためにやってくる人たちも勇気が必要だったという記述もあった。そんな雰囲気の中、学校の卒業式に出られなかった若者のために多くの教員や校長先生が卒業証書を渡すために収容所に来てくれたということも書かれている。

「ステージの向こう側には、夜空を背景にして警戒態勢をとって監視塔で任務に就いている憲兵の姿が見えた。私は内心ひどく心が痛み、困惑していたが、通常生活を象徴するその栄誉ある式に誇らしげに参加した。」<sup>8)</sup>



人々は何か月もの生活を集結センターで過ごした後メアリーたちは常設センターへ再び移動させられた。今までカリフォルニア州を離れたことがなかったメアリーにとって不安と悲しみがさらに広がったという。しかしここでも我慢強い日系人たちは黙って政府の命令に従ったという。この移動の際の描写の中に長旅になった汽車の中での出来事が書かれていた。

「白いジャケットをつけて食事を出してくれる黒人のウェーターが印象に残った。彼らは私たちに温かい心で接し理解を示してくれていた。私たちが受けていた不公正な扱いに対し、特別な感情を抱いているようだった。」<sup>9)</sup>

同じマイノリティとして日系人に対して同情の気持ちに接することができたことはメアリーに救われた気持ちになれたひと時であったのであろう。こうしてたどり着いたのはアーカンソー州のジェロームであった。ここでもメアリーは一世たちの哀れな姿を描写している。

「何時間にも思えるほどの長い時間が過ぎて、やっと、列車は停止し、私たちは降りた。暗闇の中で自分がどこにいるのか全く分からなくなった。おじいさんはスーツケースの上に座り、くしゃくしゃのコートを着て、ペシャンコの帽子を被ったみじめな姿で、正面をじっと見つめていた。おぼさんの途方に暮れた姿を見て涙が出た。アルの妹のナミは黙ったまま誰かの指示を辛抱強く待っていた。

私の幼いメリヨは木箱の上に座って眠たそうにしていた。娘は、前の日から何も食べていなかった。私は彼女がよろめいて木箱からずれ落ちそうになったので駆け寄ったが、私が抱きかかえる間もなく落ちてしまった。メリヨは痙攣をおこして大きな声で泣いて、ほかの子供たちをびっくりさせた。間もなく子

供たちの大きな泣き声が抗議の合唱になって私たちの疲れが増した。」1942年10月18日の夜、メアリーたちはアーカンソー州のジェロームについたのである<sup>10)</sup>。

ジェロームはカリフォルニアとは違い湿気が多い気候で収容所の人たちは日一日元気がなくなっていくという。その中でもメアリーたちは木くずで家具を作ったり食堂をクリスマスの飾りで飾ったりしてできる限り今までの生活に近づこうと努力したという。

「私たちに対し何の刑事訴追、裁判もなかったにもかかわらず、私たちは自由も財産も奪われたのであった。アメリカはドイツやイタリアとも交戦中であつたが、日系人だけがアメリカ政府の冷酷な仕打ちを受けていた。私たちの唯一の罪は日本民族であるということであつた。憲法上の人権がひどく犯されたが、私たちには何のなす術もなかった。」

日系人のこのような意見は多くの文献で見られてきた。しかし実際の言葉で日系人の気持ちを表現した文にであったのははじめてであった。このような心の中の葛藤を表現できるのは女性ならではないかと考える。世の中は排日の嵐で政府は日系人は収容所にいたほうが身の安全を確保できるとこの不当な扱いを正当化しようとしていた。このような時でも再定住センターの管理官や戦時転住局の職員はメアリーたちの大きな苦しみと理解の態度を示してくれたという。故郷から遠く離れて迎える初めてのクリスマスに彼らは個人的に関わり、メアリーたちに思いやりと善意を示してくれたという。この文面も今までの作品や新聞記事に見られなかったもので収容所の日系人と外の世界にいるアメリカ人との関係に新たな見方を与えてくれた。クリスマスには多くの教会から音楽のタレントが来て宗教行事を行なったという。トランペット奏者、バイオリニスト、声楽家で、多彩な音楽家で

構成された合唱団と競演したという。彼らは実績のある音楽家たちであったという。収容所に出向くのは他のアメリカ人には勇気がいることでほとんどありえなかったと書かれていたのでこのような様子を描写した文面は驚きとともに少し心の開放感を感じもした。

「まだ会ったことのない女の子へ。この贈り物の受け取り人は、私と同じくらいにアメリカを愛していることを知っています。また、あなたと私が愛しているこの国に対して、忠実であることを知っています。」<sup>11)</sup>

このようなメッセージとともにプレゼントが送られたということも書かれていた。私は将来を担う子供たちの中に正しい考えをもって行動できる子供の数が増えることが日系人の将来を希望に満ちたものに導いてきたと考えている。

このような心温まるエピソードの半面戦時転住局は立ち退き者全員に登録をするように命令をうけ、日系社会に亀裂を生じさせる事態になっていた。この登録にはこのような質問が含まれていた。

27 あなたはアメリカ合衆国の軍隊に入隊し、命令されたら喜んで何処でも、戦闘任務につきますか。

28 あなたはアメリカ合衆国に対して無条件に忠誠を誓い、国内外の軍隊によるいかなる攻撃に対しても誠意をもってアメリカ合衆国を防衛しますか。また、日本国天皇や他のどの国の政府や権力、組織に対してもいかなる形での忠誠心も抱かず、その命令に服従しないことをちかいますか。

この質問に多くの日系人はイエスイエスと答えた。一世たちは働かなくても食事を用意してもらえることに感謝した、老人でも許さ

れるならいつでも鉄砲を持って戦場に駆け付けると言った。しかし政府の行動に怒りを覚えた人たちは素直に従おうとする人たちに襲い掛かりおおきな暴動が起きたという。暴動の先には日系アメリカ人だけで編成された442部隊に入り多くの命が落とされたという事実がある。こうして命と引き換えにアメリカへの忠誠を示した若者がいる一方で収容所では娯楽が充実しダンスパーティーも開かれ楽しんだ若者もいたという。このような娯楽の内容にも驚いたが大学に行く年頃の若者たちが、一人一人収容所を去り始めたと書かれていることにはさらに驚いた。こんなに早い段階で多くの学生が大学に入るために収容所を出ていったことはあまり知られていなかったからである。又保育園、幼稚園、小学校、中高校が収容所にできたことも書かれている。

収容所での生活をより充実したものにするため工芸品の展示も企画された。一世たちは木の端や服の切れ端を利用して人形や美術工芸品を作っていた。これらを見たときメアリーはこのように語っている。

「私はアメリカ人になろうと一生懸命努力をしていた時で、またこのようにひどい目にあっているということもあって、日本的なことをどれだけ軽蔑し拒否してきたことか。しかし、多くの人たちが祖先の文化を率直に愛して賞賛し、またその文化のお陰でそのような美を造り出していることを目のあたりにして、私は生まれて初めて祖先の文化の良さに目覚めた。私たちはこの共通の喜びと誇りを皆で分かち合い、私は徐々に日本人の価値を認め始めた。」<sup>12)</sup>

日本人の血が流れていることに嫌悪感を抱いて日系人としての自分の背景を恨んで過ごしていたはずのメアリーに芽生えたアイデン

ティティがこの後の人生に大きな影響を与え後に日系人としての誇りをもって活動することになったのだろう。

さらに「1943年には、思い切って収容所を出て行く被収容者を支援するために、主要都市に戦時転住局の移転・再定住担当地区事務局が開設され始めた。いろいろと求人があったが、それが信頼できるものかどうか確かめるための調査がなされた。このような援護と補償の下で、人々は春の終わりごろから夏の初めにかけて収容所を出始めた。ほとんどの人がデンバーやシカゴ・ソールトレークシティ・クリーブランド・カンザスシティ、ニューヨーク市のような都市に出て行った。」という内容も書かれている。終戦の2年前にすでに収容所を出ていける日系人が多数いたこともこの作品を通じて知った事実である。これは素晴らしい出来事として書かれているが果たして心から素晴らしいことだとどれだけの人が感じていたことだろう。カリフォルニアの果物畑で果物を栽培する昔の生活は結局二度と戻らなかったからである。

メアリーもYWCAの指導者の研修会議で収容所の外に初めて出る機会があった。最南部地方に旅をすることで今だ続いている黒人に対する人種差別に遭遇しショックを受けるのである。アメリカの中に根強く残る人種差別を肌で感じたメアリーはその後収容所を出て生活することに対して戸惑いを抱くのである。結局彼女たちも収容所を出て新しい生活を始めるが慣れない土地で慣れない仕事にさらなる苦しみが襲ったと書かれている。

#### 4 日系人であることの意味

彼女の本の中には次のような文章も引用されている。全米日系市民協会事務局長のマイク・マサオカが日系人の心情を現したものである<sup>13)</sup>。

#### 日系人の信条

私は日系人であることを誇りに思っている。何故なら、そのことが私にこの国の数々の素晴らしさをより深く理解するのに役立っているからである。私はこの国の制度、理念、伝統を信じている。私はこの国の遺産を讃え、その歴史を誇りにし、その将来に信を置く。この国は、私に今日この地球上で誰も享受できないような数々の自由と機会を与えてくれた。この国は、私に王様のような教育を受けさせてくれた。この国は私に市民としての数々の責任を持たせてくれた。この国は、私が他のどの人とも平等な自由人として、家建てたり生計を立てたり、信仰したり、考えたり、話したり、好きなように行動することを許してくれた。

私を差別する人がいても、憤慨したり、信仰心を失ったりするようなことは決してしない。何故なら、私はこのような人たちがアメリカ人の大多数を代表しているわけではないことを知っているからだ。私はそのような行為をやめさせるために、あらゆる努力を払うつもりである。それもアメリカ的に、つまり正々堂々と公の場で、裁判を通じて、教育により、また自分自身が平等の処遇を受ける資格があることを証明することによってである。私は、アメリカ人がスポーツマンシップとフェアプレーの精神で、市民の資格と愛国心を、身体的な特徴によってではなく、行動と業績に基づいて判断することを固く信じている。

私はアメリカを信じ、この国が私を信じていると確信し、これまでこの国から数えきれないほどの恩恵を受けてきたので、いつでもどこでもこの国に敬意を表すことを誓う。すなわち、この国の憲法を支持し、法令を守り、国旗に敬意を表し、内外のすべての敵からこの国を守ることを誓う。より偉大なアメリカ

でより良きアメリカ人になることを願って、国民としての責任と責務を積極的かつ喜んで無条件に果たすことを誓う。

メアリーは、マサオカのこの言葉を心の支えにその後の補償運動の中心になって活躍することになる。いったんカラマズーに仕事と自由を求めて移り住んだツカモト一家は待遇の悪さ故郷への強い思いで故郷フローリンに帰る決意をした。この時の思いをこのように述べている。

「再び故郷に帰るときはどういう気持ちになるのだろうかと三年以上も考えつ続けた。帰郷は楽しく、信じられられないほどうれしい反面、体中の水分が抜かれ、心のあちこちに大きな穴を開けられたような気持ちにもなる。」<sup>14)</sup>

収容された日系人はみな少なからず同じような不安に苦しみられていたであろう。しかし無実の自分たちが故郷の帰って昔道理に暮らしたいを思うのは当然のことであり多くの期待を抱き戻っていったことであろう。戦時転住局は家財の運送費を払うことを約束したという。ほとんどの家財を残して出た人たちには大した運送費にはならなかったが、戦時転住局がこのことを申し出たことは大きな意味を持ったという。自分たちの行為が間違っていたと表明した一つだと考えられたからであろう。しかしこの喜びもつかのま、故郷フローリンは多くの家が焼かれ家財を預けた教会や集会所は略奪され町はほぼ消滅していたという。幸いメアリーたちの家は残っていたので多くの家を失った人たちが集まり、教会や集会所も施設のようなだったという。この様子は次のように書かれている。

「1981年、ゴールデン・ゲートで開かれた調査委員会の聴聞会で、ネリー・サカキハは、年老いた両親が鳥小屋に住んでいるのを見てどれほど衝撃を受け、恥ずかしい思いをしたか話した。その人たちの農場は収容所にいたときに借金を払うことができなかったことから二束三文で売られていた。」<sup>15)</sup>

仕事を奪われたのだから借金の返済が滞るのは当然でそれを理由に土地を売り払われた恨みは大きいことであろう。このように不当な扱いを受けたこと、その後もほとんど改善することもできず人生を終わろうとしている親たちの姿に二世三世は許しがたい怒りを持つのである。しかし補償問題が起きるのが遅くなったのは、この日系人たちが自分たちの体験を話したがいなかったからである。できるだけ早く忘れたかった、しかも早ければ早いほど皆にとって良いことだと考えたからだという。過去との戦いだけでなく彼らは生きるために仕事を見つけ子供たちに教育を受けさせる場所を作り出さなければならなかった。メアリー一家はほとんど役に立たなくなった荒廃したブドウ畑の仕事をあきらめ夫は電気通信機の修理の仕事を見つけ、メアリーは教員への道が提示されたのである。大学では日系人が公立学校の教員になることはありえないといわれ一度はあきらめた道だった。しかし昔の恩師や地元の校長たちの協力で代用教員の仕事をする傍ら、単位を修得して正式の教師になることになったという。

一世たちにもついに合衆国市民になるチャンスが来た。マッカラン＝ウオルター移民帰化法が1952年6月に制定されたのである。1954年3月16日フローリンでは60人の男女が市民権を取った。その陰には時が遅すぎて英語を学習する能力がなくなり断念した40人の一世もいた。



## 5 日本への理解と補償問題

メアリーたちは日本を訪れる機会を見つけ、また愛娘も日本での教員の職を見つけた。華道や茶道を習い日本の文化にさらに触れ、自分たちのアイデンティティを確立することを決意する。沖縄や広島で親戚を見つける旅をした。自分たちは日本との懸け橋にならなければならないと考えるようになったという。教員生活を終えたメアリーは次に世界の平和のために働こうと決心する。1977年4月学校の同僚だったキミ・カネコが子供たちの文化遺産学校を設立するので協力してほしいと言ってくる。ジャンケンボンという学校は非営利、協同組合組織の私立サマースクールで子供たちに祖先の国である日本の豊かな文化遺産を教えるための両親の参画と地域の教材改革に重点を置いたものだった。私はこの学校の存在をこの本を読んで初めて知ったが、ここでは5歳から12歳のまでの児童のために日本語、日本料理とその試食、そして日系アメリカ人の歴史などへの入門コースを準備したという。また民話、音楽、歌を学習して、生け花、墨絵、着物、武術、楽器などの実演に参加してもらったという。さらにろうけつ染め、折り紙、紋切り型、面、陶磁器、その他多様な芸術体験が組み込まれていた。今の日本人の子供達でも体験したことのないような伝統に基づいたこのカリキュラムを見ていかに日系人たちが自分たちのアイデンティティーの追求に熱心だったか改めて知らされた気がした。日本という名前が死、拷問、裏切り、偽りと同義であり、それがアメリカで多くの悲劇を引き起こしたので一世たちは生まれた島国を忘れるのが賢明だと考え生きてきた。死んでしまった一世のためにも伝えたかった彼らの文化を今よみがえらせようとしていた。こうした活動の中で起きたのが一人の児童の質問だった。

「あんなに長い間刑務所に入れられるなんてひいおじいちゃんたちはどんな悪いことをしたの？」<sup>16)</sup>

日々日本人のルーツをたどる旅に行き、日本人の食生活を教え、その素晴らしい文化を継承しようと活動していたメアリーにとってこれは衝撃だった。彼女がこの本を友人の作家の手を借り出版したのも真実を一人でも多くの人に知ってもらいたかったからである。20年にもわたって一世誌編集をしてきたシグ・ワカマツは少しでも正確で一世二世の綿密な社会的調査を続けた。このことにより立ち退き賠償請求法とマッカラン＝ウオルター移民帰化法の制定を後押しした。自分の経験をまだ覚えていて人に語れる一世からのデーターを必死に集めたという。時が流れ高齢になりすぎた一世が多すぎたこと、過去を恥だと口を開こうとしなかった一世や二世のためこの作業は大変な労力がかかったという。しかし彼らは残された日系人のために必死で不当な扱いに対して裁判でも証人となった。第一回聴聞会が1981年7月にワシントンDCで行われ、そこでメアリーはこのように証言したと述べている。

「この子たちはアメリカが長い目で見れば、公正であり、彼らの祖父母が強制収容所に入れられるようなことは何一つしていなかったし、何の罪もなかったことを知る必要があります。私たちは40年間アメリカの歴史書の中で無視され、この非難なき不正行為を耐え抜いたのです。犠牲者である私たちがアメリカのために思い、その過ちを是正する努力をしなければ、私たちの歴史に記載されたこの非道な出来事を清める人は誰一人いないでしょう。それどころか、それが繰り返される恐れもあります。すべての世代に真実が教えられ、私たちの悲劇の経験の記録を清めるための教

科書が書かれることを確認する必要があると思います。あらゆる場所で、人々に私たちの政府は過ちを犯したが、それを正す偉大さを持っていたこと、また教育機関も、すべての国民のために、自由、正義、公正な扱いの拡大への地固めの努力をしたことを、知らせなければなりません。最終的には、我が国の最高裁判所でさえも、この事件を審査し、事実を明らかにするであろうことを知らしめねばなりません。」<sup>17)</sup>

彼女はおじいさんおばあさん、両親、友人達そして収容所の子供達のために話したと語っている。多くの戦前、戦時中、そして戦後の本や資料を研究してきた私の脳裏にも見たことはないが手に取るように分かった多くの日系人たちの悲しみ、苦しみ、その中で精いっぱい人間らしく生き、ささやかな喜びを分かち合った日系人たちを思い浮かべた。「1988年の市民的自由法」について研究したとき十分に理解できていなかった日系人の心を改めて教えてもらったのだと思った。

750人もの証言と膨大な調査や審議を経て、委員会は連邦議会と国民に2年間に及ぶ調査の結果を報告した。その報告書は、『否定された個人への正義』と題されていて、その大意は、大統領行政命令第9066号が、軍事要請によって正当化されうるものでないことは明らかである、ということである。また同報告書は、1942年の決定を形成した諸般の歴史的原因は、人種的偏見、戦時のヒステリー、そして政治的指導力の欠如であったと主張している。こうして1988年の市民的が成立し日系人たちの名誉が回復したのである。

## 終わりに

「1988年の市民的自由法」成立までの公聴会での資料を今まで手に入れることができた

かった。新聞の記事などで理解していたつもりであったが、一人の女性の真実の声がかかれているこの本の重みを改めて感じ取っている。日系アメリカ人の歴史を正しく伝えることが日系人にとっても日系人の研究者にとっても大切である。命がけで生きてきた彼らを歴史をできるだけ多くの文献を通して研究していきたいと再確認している。

アメリカはくしくも新大統領に代わろうとしている。トランプ新大統領は移民の排除して新しいアメリカを作ると宣言し大統領令に署名した。多くの移民の中には親が市民権を持たず子供だけが市民である家族がいる。かつての日系人たちのような歴史が繰り返されるのではないかと恐れている。これからアメリカはどこに行くのか世界中が不安を抱き見守っている。メアリーたち日系人の苦しみが無駄にならないようただ祈るばかりである。

## 注

- 1) メアリー・ツカモト, We the People, Translation Committee of the Mills Association Shinyu Uku, Hojun Kakinohara, Kentoku, 2001, 琉球.新報社, p366.
- 2) 山本茂美, 1988年市民的自由法と日系アメリカ文学, 金城学院大学論集, 人文科学編, 第9巻第号, 2013年3月。
- 3) メアリー・ツカモト, p374.
- 4) メアリー・ツカモト, p40.
- 5) メアリー・ツカモト, p58.
- 6) メアリー・ツカモト, p93.
- 7) メアリー・ツカモト, p168.
- 8) メアリー・ツカモト, p168.
- 9) メアリー・ツカモト, p172.
- 10) メアリー・ツカモト, p177.
- 11) メアリー・ツカモト, p193.
- 12) メアリー・ツカモト, p189.
- 13) メアリー・ツカモト, p257.
- 14) メアリー・ツカモト, p289.
- 15) メアリー・ツカモト, p301.
- 16) メアリー・ツカモト, p371.
- 17) メアリー・ツカモト, p376.

### Work Cited

- メアリー・ツカモト, エリザベス・ピンカートン,  
「アメリカを動かした日系女性, —第二次世界  
大戦中の強制収容所と日系人のたたかい—, 琉  
球新報社, 沖縄市, 2001年。
- ダニエル・沖本, 山岡清二訳『仮面のアメリカ人』,  
サイマル出版, サイマル出版社, 1971.
- Danieru I Okimoto, *American in Disguise*, John  
Weatherhill, Inc, New York and Tokyou, 1971.。
- ダニエル・沖本—日本を代表する国際政治経済学  
者
- 山本茂美, 「1988年市民的自由法と日系アメリカ  
三世文学」, 『金城学院大学論集』人文科学編,  
第9巻第2号, 2013年3月。
- 山本茂美, 442部隊の真実, —日系アメリカ人最  
初の上院議員ダニエル・イノウエの自叙伝を中  
心に—, 『金城学院論集』人文科学編, 第10巻  
第2号, 2014年3月

### Work Consulted

- 北村崇郎, 『一世として生きて』, 草思社, 東京,  
1992.
- 黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京,  
1979.
- 鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東  
京, 1971.
- 村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社,  
1971.
- 若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京,  
1971. <http://news-log.jp/archives/5950>
- 前山陸; ハワイの辛抱人, お茶の水書房, 東京,  
1986. [http://www.foxnews.com/politics/election/  
candidate/Daniel-ken-inoue/](http://www.foxnews.com/politics/election/candidate/Daniel-ken-inoue/)
- ジョン・オカダ, 中山容訳; ノーノーボーイ, 東  
京, 1981